

# 小学校英語教育におけるカタカナ英語について

## Katakana Loan Words in Elementary School English Education

福田 稔

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』には、外来語への言及がないものの、その授業での活用については期待されている。具体的な活動を検討することが必要であるが、さらに本稿では以下の 3 点を指摘する。まず、カタカナ英語は、英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くための活動や、外来語とそれが由来する英語との違いに気付くための活動において、有効利用できる。しかし、カタカナ英語を授業で活用する際には、個々の単語に関する十分な準備が必要である。次に、英語以外の教科等と関連付けた指導を行うためにカタカナ英語を利用する際は、教科ごとにカタカナ英語の扱いが異なる点に留意する必要がある。最後に、カタカナ英語の元となる英語表現の多くが実際に英語でよく用いられているので、カタカナ英語の学習は将来の英語学習にとって有用で、無駄にならない。この事実は児童のカタカナ英語に関する学習の動機付けの一翼を担うと期待される。

キーワード：外来語、カタカナ英語、英語教育、発音、小学校、コーパス、BNC、COCA

### 目次

- I はじめに
- II 学習指導要領における外来語
- III 外国語活動の分析
- IV 国語における外来語
- V コーパス調査
- VI おわりに

---

## I はじめに

外来語はカタカナ語とも呼ばれることがあるが、日本独自の和語と中国から持ち込まれた漢語と区別される。本稿で扱う外来語は英語に由来する語であり、カタカナで表記されることからカタカナ英語とも呼ばれる。英語の発音に対応する（類似した）日本語の発音に置き換えるという作業を通して形成された語が多い。しかし、日英語の発音の違いから、カタカナ英語と元の英語の発音に違い

があるものがほとんどである。また、実際の英語とは異なる表現となっているカタカナ英語もある。

本稿ではカタカナ英語を中心に、小学校英語教育における活用の注意点を論じる。

まず第Ⅱ節では、学習指導要領において、外来語への言及が無いことを指摘する。ただし、文部科学省が作成した小学校英語教育の補助資料においては、外来語の活用に触れられている。しかし、これにはさらに検討を要する課題があると論じる。カタカナ英語は、英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くための活動や、外来語とそれが由来する英語との違いに気付くための活動において、有効利用できると思われる。しかし、第Ⅲ節では、カタカナ英語を授業で活用する際には、個々の単語に関する十分な準備が必要であることを指摘する。第Ⅳ節では、国語など英語以外の教科等と関連付けた指導を行う際にカタカナ英語を利用する場合、教科ごとにカタカナ英語の扱いが異なる点に留意する必要があることを指摘する。第Ⅴ節では、カタカナ英語の元となる英語表現の多くが実際に英語でよく用いられているという事実を大規模コーパスの調査によって明らかにする。第Ⅵ節では、本稿の議論をまとめる。

## Ⅱ 学習指導要領における外来語<sup>1</sup>

『小学校学習指導要領（平成29年告示）』において、「第2章 各教科」の「第10節 外国語」では外来語に関する記述は無い<sup>2</sup>。また、「第4章 外国語活動」にも外来語に関する記述は無い。

しかし、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』では、外来語に関する記述がわずかに見受けられる。「第1部 外国語活動、第2章 外国語活動の目標及び内容」にある「第2節 英語」の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」（p.49）において、下記の通り記されている（下線は筆者による）。

### (1)

(2) 2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

ア 英語でのコミュニケーションを体験させる際は、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。

この配慮事項は、英語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮して表現を選定するとともに、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定し、児童が積極的にコミュニケーションを図ることができるように指導することの必要性を述べている。

英語に初めて触れる段階であることを踏まえると、外来語など児童が聞いたことのある表現や身近な内容を活用し、中学年の児童の発達の段階や興味・関心に合った身近なコミ

ニケーションの場面で、英語でのコミュニケーションを体験させることが大切である。

ただし、(1)の下線部「外来語など児童が聞いたことのある表現や身近な内容を活用し」の「活用」については、具体的な活用法が明示的に記されていない。

実際のところ、外来語の活用に言及されているのは、平成29年7月に文部科学省のウェブサイト ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)) にアップロードされた『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』(p. 32, p. 36, p. 37, p. 40) と、『授業研究編Ⅱ 外国語』(p. 40, p. 41, p. 50) の2つである。以下に外来語が言及されている文章のみを下記に引用するが、(2)から(4)は『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』から、(5)から(7)は『授業研究編Ⅱ 外国語』からである(下線は筆者による)。これらは文部科学省が作成した教材 *Let's Try1* (小学3年生用) に基づいている。なお、全学年の新教材は文部科学省のウェブサイトからダウンロード可能である ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm))。

(2) 「第3学年 外国語活動 年間指導計画例〔案〕」

- a. 多様な考え方があることや、外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付き、色の言い方や、好きかどうかを尋ねたり答えたりする語や表現に慣れ親しむ。(p. 32)
- b. 外来語とそれが由来する英語の違いに気付き、身の回りの物の言い方や、ある物が何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。(p. 32)

(3) 「単元指導計画 第3学年 Unit 4 I like blue. すきなものをつたえよう」

- a. 多様な考え方があることや、外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付き、色の言い方や、好みを表したり好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。(知識及び技能) (p. 36)
- b. 外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くとともに、好みを表す表現に慣れ親しむ。(p. 37)

(4) 「指導案 2/4 時間」目標 外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くとともに、好みを表す表現に慣れ親しむ。(p. 40)

(5) 「2 年間指導計画の立案」の「3 外国語活動・外国語科のねらいとシラバス類型」混在型とは、「道案内」や「クイズ大会」のような場面を中心に単元が組まれていたり、「数」や「外来語」のような話題・題材を中心に組んだりした単元があるなどの様々なシラバスから構成されているものであり、児童にとっても、学習に飽きることなく集中できるように考えられているものである。(p. 40)

(6) 「3 指導案の作成」の「1 学習指導案の書き方」

多様な考え方があることや、外来語を通して英語の音声やリズムなど日本語の違いに気付

き、色の言い方や、好きかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。(知識及び技能)  
(p. 41)

(7) 「2 他教科等と関連付けた指導」

指導内容例	関連教科・領域
外来語と日本語を比べよう!	国語等 (p. 50)

(2) から (7) の要点を抽出すると、外来語やカタカナ英語は以下の目的で活用されることになる。

- (8) a. 英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くため。
- b. 外来語とそれが由来する英語との違いに気付くため。
- c. 混在型のシラバスを設計するため。
- d. 他教科等と関連付けた指導を行うため。

(8a) は日英語の発音の違いに気付くことを目標とした活用であり、(8b) は日英語の表現の違いに気付くことを目標とした活用である<sup>3)</sup>。そこで、新学習指導要領で英語に親しむ活動を行う小学生中学年(3・4年生)と、英語が正式教科となる高学年(5・6年生)では、どのような外来語が教材となり得るのか検討する必要がある。また、「気付く」という目的のための具体的な活動を検討することも必要となる。

### III 外国語活動の分析

(2) から (4) に示したように、『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』には「第3学年外国語活動 年間指導計画例〔案〕」の中で外来語を扱うことに言及されている。(9) は p. 36 からの引用であるが、「色、スポーツ、飲食物、野菜」を表す英単語が記されている。

- (9) ○ I like (blue). I don't like (blue). Do you like (blue)? Yes, I do. / No, I don't.  
○色 (blue, red, green, yellow, pink, black, white, orange, purple, brown)  
スポーツ (soccer, tennis, baseball, basketball, dodgeball, swimming)  
飲食物 (ice cream, pudding, milk, orange juice)  
野菜 (onion, green pepper, cucumber, carrot)

注意すべき点が2つある。第一に、英単語は示されているが、外来語は示されていないことである。第二に、これらの英単語が(8a, b)とどのように関係するか記されていない点にも注意が必要である。

結局のところ、指導者は (9) に示された英単語を自分で分析する必要がある。

例えば、上記の英単語をカタカナ英語に置き換えてみると、下記の通りとなる。

(10) a.	色				
	blue	ブルー	red	レッド	
	green	グリーン	yellow	イエロー	
	pink	ピンク	black	ブラック	
	white	ホワイト	orange	オレンジ	
	purple	パープル	brown	ブラウン	
b.	スポーツ				
	soccer	サッカー	tennis	テニス	
	baseball	ベースボール	basketball	バスケットボール	
	dodgeball	ドッジボール	swimming	スイミング	
c.	飲食物				
	ice cream	アイスクリーム	pudding	プリン	
	milk	ミルク	orange juice	オレンジジュース	
d.	野菜				
	onion	オニオン	green pepper	ピーマン	
	cucumber	キューカンバー <sup>4</sup>	carrot	キャロット	

次に、これらが (8a, b) とどのように関係するか考察してみよう。まず、(8a) であるが、英語の音声やリズムなどにカタカナ英語と違いがあるものばかりである。その中でも、余分な母音の子音の後に入れるために、英語とカタカナ英語の音声に違いが生じているものが大多数を占める。(11) では、余分に入れられた母音がある箇所を下線で示した。

(11) a.	色				
	b_lue	ブルー	red_	レッド	
	g_reen	グリーン	pink_	ピンク	
	b_lack_	ブラック	white_	ホワイト	
	orange_	オレンジ	purp_le_	パープル	
	b_rown	ブラウン			
b.	スポーツ <sup>5</sup>				
	tennis_	テニス	base_ball_	ベースボール	
	bas_ket_ball_	バスケットボール	dodge_ball_	ドッジボール	

- s\_wimming\_ スイミング
- c. 飲食物  
ice\_c\_ream\_ アイスクリーム                      mil\_k\_                      ミルク  
orange\_juice\_ オレンジジュース
- d. 野菜  
carrot\_                      キャロット

次に、母音の発音が日英語で異なるものを指摘したい。(12)に記したように、下線部は実際の英語とカタカナ英語の母音の発音が異なる箇所を示している。また、強勢が置かれているのにカタカナ英語では分かりにくいものもこれに含めた。

- (12) a. 色  
yellow                      イエロ                      black                      ブラック  
orange                      オレンジ
- b. スポーツ  
soccer                      サッカー                      tennis                      テニス  
baseball                      ベースボール                      basketball                      バスケットボール  
dodgeball                      ドッジボール                      swimming                      スイミング
- c. 飲食物  
ice cream                      アイスクリーム                      orange juice                      オレンジジュース
- d. 野菜  
onion                      オニオン  
cucumber                      キューカンバー                      carrot                      キャロット

数は少ないものの、カタカナ英語では英単語の子音が脱落しているもの、他の子音に置き換わっているものもある。なお、いちいち取り上げないが、日本語の「ラ行」の子音は英語の /r/ と異なるので、関連する全ての語で注意が必要である。

- (13) a. スポーツ  
swimming                      スイミング
- b. 飲食物  
pudding                      プリン

さて、(8b) に関してだが、カタカナ英語とそれが由来する英語に違いがあるものとして、(14) がある。それぞれの解説を (14) の下に記した。

- (14) a. 飲食物  
pudding プリン orange juice オレンジジュース  
d. 野菜  
green pepper ピーマン cucumber キューカンバー

まず、英単語 **pudding** とカタカナ英語の「プリン」であるが、「プリン」は一般に「西洋菓子の一種」で、「牛乳、卵、砂糖などを混ぜ、蒸して固めたもの」と限定された食品を指す<sup>6</sup>。しかし、英単語 **pudding** は指し示す範囲が広く、焼き菓子や肉の腸詰めが入ったパイなども指すことがある<sup>7</sup>。

次に、**orange juice** と「オレンジジュース」であるが、もともと英単語 **juice** は「果汁 100 パーセントの飲み物」しか指さない。したがって、**orange juice** は「果汁 100 パーセントのオレンジジュース」のことなので、その場合に限って、「オレンジジュース」は同義語となる。ちなみに、100% でない飲み物は英語では **soft drink** が用いられる。

さて、野菜の表現に関してはいくつかの点で注意が必要となる。まず、**green pepper** と「ピーマン」は 2 つの点で注意が必要である。まず、厳密には「ピーマン」はカタカナ英語ではない。これはフランス語 **piment** に由来する外来語である<sup>8</sup>。また、「ピーマン」は英語の **pee man**（小便男）のように聞こえるため注意が必要となる。

最後の、**cucumber** と「キューカンバー」であるが、小学 3 年生の児童のどれくらいが「キューカンバー」を知っているのか分からないが、必ずしも日本語の「キュウリ」と同じものを指さないようである。Google の画像検索をすれば分かるように、**cucumber** には「キュウリ」よりもかなり太いものが多数を占めるからである。

以上の考察から、「色、スポーツ、飲食物、野菜」を表す英単語とカタカナ英語といった、限られた数の語だけでも多くのことを事前に調べておく必要があることが分かる。つまり、英語教育の中で外来語を活用するには、事前の準備が必要不可欠なのである。

#### IV 国語における外来語

さて、(7) で触れたように、外来語の活用法として、国語などの他の教科と関連づけた取り組みが『授業研究編Ⅱ 外国語』に記されている。しかしながら、興味深いことに、国語において外来語は英語と異なる扱いを受けている。これは教科の目的が英語と異なることに起因していると思われる。

例えば、『小学生のまんがカタカナ語辞典』（以下、『カタカナ語辞典』と略）では、209 の外来語

(内3は略語)が見出し語となって、原語の綴り字<sup>9</sup>、意味、使い方、類語、関連語などの説明がなされている。本節では、例として『カタカナ語辞典』の見出し語にある「アイデンティティー」、「クーラー」、「パターン」を検討して、英語での外来語の扱いとの違いを指摘したい。

まず、「アイデンティティー」であるが、『カタカナ語辞典』には「たとえ時間や場所が変わっても、自分が、ほかのだれでもなく自分であるという感じ。自分らしさ。自己同一性。独自性。」という意味が載っている。抽象的な概念であるため、小学生が理解するのは難しいと思われる。また、『ジーニアス英語辞典』(第5版)によると、英単語の *identity* は高校学習単語である。つまり、英語科で小学生が学ぶことを要求していない語を、国語科では要求する理由は何だろうか。教科による不統一性は今後検討が必要となる。

次に、「クーラー」であるが、『カタカナ語辞典』には、意味の解説として、「①温度を下げて、すずしくするしかけ。冷房装置。」と、「②持ち運ぶことのできる小さな冷蔵庫。クーラー・ボックス」の2つが記されている。「クーラー」は英単語 *cooler* のカタカナ英語であるが、英単語 *cooler* には①の意味は無く、専ら②の意味である。英語では①の機能を持った電化製品は *air-conditioner* であり、*cooler* とは区別される。ところが、『カタカナ語辞典』では、英単語 *cooler* の説明や、日英語の違いには触れられていない。

次に、「パターン」であるが、英単語 *pattern* (*ˈpætərn*) は強勢が最初の音節にあるので、日本語の「パターン」と異なる。英語では「パタン」のようになるからである。しかし、『カタカナ語辞典』には発音上の相違点には言及がない。

検討したのは3例のみであるが、国語教育では(8a, b)に相当することには必ずしも関心が払われていないことが窺われる<sup>10</sup>。また、(8d)で触れたように、国語での外来語の教材を英語と関連付けて使用する場合は、この点に注意する必要がある。

## V コーパス調査

カタカナ英語を英語の授業で活用する場合、もし元の英単語の頻度が高ければ、授業で学んだことは将来の英語学習にとって無駄になることはない。そのことを予め児童に伝えることで、学習意欲を高めたり、維持することが可能となるだろう。

そこで、中学年(3・4年生)と高学年(5・6年生)の児童が知っていると思われるカタカナ英語の中から(15)と(16)に記したものを取り上げて、大規模コーパスで頻度を調査した。用いたのはイギリス英語のコーパス BNC (*British National Corpus*) とアメリカ英語のコーパス COCA (*Corpus of Contemporary American English*) である<sup>11</sup>。各コーパスで100万語あたりの出現数を調査した。(15)と(16)がその調査結果である。(15)は実際の英語の発音と異なるカタカナ英語であり、(16)は実際の英語とは異なる表現法のカタカナ英語である。

小学校英語教育におけるカタカナ英語について（福田稔）

(15) 100万語あたりの出現数（実際の発音と異なるカタカナ英語）

		BNC	COCA	
ア行	アイロン (iron)	44.15	35.94	
	イタリア (Italy)	49.76	27.05	
	インド (India)	44.65	45.36	
	オーストラリア (Australia)	48.66	23.68	
	オランダ (Holland)	15.13	8.02	
	オレンジ (orange)	25.82	47.84	
	カ行	カーテン (curtain)	13.26	11.10
		キロメートル (kilometer <sup>12</sup> )	0.08	1.54
	コー	コーヒー (coffee)	62.13	69.56
		ココア (cocoa)	4.79	4.54
サ行		シチュー (stew)	3.25	5.80
		ステーキ (steak)	4.63	10.14
	セーター (sweater)	5.65	10.10	
タ行	チューブ (tube)	19.27	20.02	
	チョコレート (chocolate)	19.31	28.82	
	ツイッター (Twitter <sup>13</sup> )	0.11	19.18	
	テーブル (table)	191.16	289.37	
	ドイツ (Germany)	99.55	53.70	
ハ行	バナナ (banana)	5.08	8.12	
	ビニール (vinyl)	3.03	4.19	
	フード (food)	184.36	231.51	
	ポーチ (pouch)	3.28	3.46	
	ポテト (potato)	8.51	14.77	
マ行	マラソン (marathon)	9.16	8.30	
ラ行	レース (race)	77.52	123.54	
	ロシア (Russia)	41.10	65.62	

(16) 100万語あたりの出現数（実際とは異なる表現法のカタカナ英語）

		BNC	COCA
カレーライス	curry and rice <sup>14</sup>	0.04	0.01
ゴム	rubber	15.30	16.40
コンセント	consent	35.22	16.82

	socket (BrE)	5.63	
	outlet (AmE)		6.78
サイン	sign	79.39	102.59
	signature	10.39	15.93
	autograph	1.72	2.53
ジェットコースター	roller coaster	0.21	2.45
シャープペンシル	mechanical pencil	0.02	0.04
シュークリーム	cream puff	0.02	0.09
スーパー	supermarket	10.27	8.58
セロテープ	Scotch tape	0.07	0.24
ソフトクリーム	soft serve ice cream	0.00	0.01
電子レンジ	microwave	6.28	7.94
パン	bread	36.21	38.03
ビニール袋	plastic bag	2.05	3.32

100 万語あたりの出現数が 5 を超えて 10 に近づくと、何度か目にしたことがある・耳にしたことがあると感じられる単語や表現であるように思われる<sup>15</sup>。その基準で (15) を見てみると、「実際の発音と異なるカタカナ英語」が由来した英単語の多くが実際の英語でよく用いられる単語であると言える。頻度が少ない単語については、考えられる理由を脚注に記した。

これに対して、「実際とは異なる表現法のカタカナ英語」の場合は、(16) から分かるように、表現によって用いられる頻度の差が大きい。しかし、コーパスは主として成人が産出した表現を基礎として構築されているので、コーパスで頻度が低いからと言って、直ちに小学校中学年・高学年の児童は使う可能性が低い、あるいは、児童にとって役に立たないと結論づけることはできない。この点は十分注意すべきである。

## VI おわりに

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』には、外来語への言及がないものの、その授業での活用については期待されている。そこで、具体的な活動を検討することが必要であると第Ⅱ節で指摘した。この考察をもとに、本稿では以下の 3 点を指摘した。

まず、確かに、カタカナ英語は、英語の音声やリズムなど日本語との違いに気付くための活動や、外来語とそれが由来する英語との違いに気付くための活動において、有効利用できると思われる。しかし、第Ⅲ節で考察したように、カタカナ英語を授業で活用する際には、個々の単語に関する十

分な準備が必要であると論じた。

次に、第Ⅳ節で指摘したように、英語以外の教科等と関連付けた指導を行うためにカタカナ英語を利用する際は、教科ごとにカタカナ英語の扱いが異なる点に留意する必要があることを指摘した。

最後に、第Ⅴ節で考察したように、カタカナ英語の元となる英語表現の多くが実際に英語でよく用いられるという事実を勘案すれば、カタカナ英語の学習は将来の英語学習にとって有用で、無駄にならないと言える。この事実は児童のカタカナ英語に関する学習の動機付けの一翼を担うと期待される。言うまでもなく、さらに綿密な調査が必要である。

### 注

- <sup>1</sup> 外来語の活用に関しては既に研究論文などがあるが、本校では紙面の関係上それらの総括は行わない。
- <sup>2</sup> 「第2節 国語」にも外国語に関する言及がない。
- <sup>3</sup> 本稿では、(8c)は(8a, b)と質的に異なるため議論の対象としない。(8d)に関しては第Ⅳ節で論じる。
- <sup>4</sup> 「キュウリ」は「胡瓜」の読み方をカタカナで表記したものである。
- <sup>5</sup> 「スポーツ」は英単語sportの複数形sportsのカタカナ英語である。
- <sup>6</sup> 『ベネッセ 新修 国語辞典』（第二版）による。
- <sup>7</sup> 『ジーニアス英語辞典』（第5版）による。
- <sup>8</sup> 『ベネッセ 新修 国語辞典』（第二版）による。
- <sup>9</sup> 英語以外の原語の場合は、その言語名が記されている。
- <sup>10</sup> それなのに、『カタカナ語辞典』の「はじめに」では、「ふだん何げなく使うカタカナ語や、たまに耳にすることのあるカタカナ語をこの機会に正確に覚えてみましょう。国語だけでなく英語の勉強にもなるはずです。」と記されている。
- <sup>11</sup> BNCはBYU-BNC (<https://corpus.byu.edu/bnc/>)による。COCAも同サイトで調査を行った。
- <sup>12</sup> イギリスやアメリカ合衆国ではメートル法が採用されていないことと、頻度が低いことに密接な関係があると考えられる。
- <sup>13</sup> BNCの基礎となるデータ収集の時期とインターネットサービスのTwitterの開始時期にズレがあることが、COCAとの頻度の差として現れていると思われる。
- <sup>14</sup> 日本で好まれる食べ物であるため、英語のコーパスでは頻度が低くなると思われる。
- <sup>15</sup> 例えば、西部（2013：17）は、BNCの調査により高頻度の複合形容詞を表4として示している。51の例は全て100万語あたりの出現数3.0以上で、その内28例が5.0以上である。

### 参照文献・資料

- 西部真由美（2013）「コーパスを利用した現代英語における二要素複合形容詞の分析」  
『文明 21』30号、pp.11-24、愛知大学国際コミュニケーション学会、  
学研辞書編集室（編集）『小学生のまんが カタカナ語辞典』初版、学研教育出版、2010年、  
文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）』  
『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』  
『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』  
『授業研究編Ⅱ 外国語』  
辞書 『ベネッセ 新修 国語辞典』第二版、ベネッセコーポレーション、2012年、  
『ジーニアス英語辞典』第5版、机上版、大修館書店、2015年。

コーパス

BNC (British National Corpus)

COCA (Corpus of Contemporary American English)

<https://corpus.byu.edu/bnc/>